

産地戦略

実施期間 令和6～7年度

実施主体 愛知県
都道府県 愛知県
対象地域 愛西市、岡崎市、幸田町、西尾市、蒲郡市、豊川市、豊橋市、新城市
対象品目 イチゴ（施設）



新たに取り入れる環境にやさしい栽培技術の分類

● 化学農薬の使用量の低減	温室効果ガスの削減（水田からのメタンの排出削減）	温室効果ガスの削減（プラスチック被覆肥料対策）
化学肥料の使用量の低減	温室効果ガスの削減（バイオ炭の農地施用）	温室効果ガスの削減（省資源化）
有機農業の取組面積拡大	温室効果ガスの削減（石油由来資材からの転換）	温室効果ガスの削減（その他）

目指す姿

愛知県のイチゴ産地では、これまで環境モニタリング機器を活用した環境制御技術の確立に取組み、栽培管理技術を向上し増収を図ってきた。病害虫防除については、化学農薬の使用回数の削減による省力化が求められており、みどりの食料システム戦略や消費者志向の変化を受けて、環境に配慮した病害虫防除体系の確立に向けた機運が高まっている。産地では、アザミウマ類等については主に化学合成農薬により防除しているが、天敵等生物農薬や光反射資材等の物理的防除を組み合わせた防除技術を普及し、化学農薬使用量を削減する。灰色かび病は多湿環境で発生しやすく秋から春にかけ被害が多い。ICT機器によってハウス内の温湿度むらを把握し、加温や換気方法等施設内の環境むらを改善する取組を実施し、灰色かび病発生リスクを低減する。炭疽病は高温により育苗期の発生が増加しており、診断が遅れると甚大な被害となる。炭疽病の感染株は生理障害や他病害との判別が難しく、診断が遅れる場合がある。早期・迅速に診断を行い感染株を除去することで、被害を防ぐとともに病害拡大リスクを低減する。

現在の栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
主な作業名													
技術名													

グリーンな栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
主な作業名													
技術名													

グリーンな栽培体系等の取組面積の目標

	現状R7	目標R12	備考
（参考）対象品目の作付面積（ha）	260	260	
グリーンな栽培体系の取組面積（ha）	0.3	3	
環境にやさしい栽培技術の取組面積（ha）	0.3	3	
省力化に資する技術の取組面積（ha）	0.3	3	

環境にやさしい栽培技術・省力化に資する技術の概要

〈技術の内容・効果〉

分類	産地の慣行	新たに取り入れる技術	期待される効果
環境 省力	アザミウマ類の化学農薬のみの防除	▶ 天敵資材や光反射資材を活用したIPM	化学農薬の使用回数の削減 薬剤抵抗性の発生リスク軽減
環境 省力	灰色かび病の化学農薬を中心とした防除	▶ 多点計測による厳寒期の環境ムラ改善	化学農薬の使用回数の削減 薬剤抵抗性の発生リスク軽減
環境 省力	炭疽病の化学農薬のみの防除	▶ PCR検査による炭疽病の迅速診断	感染拡大対策、初期発生での検知による被害軽減 感染防止による化学農薬の使用回数の削減

〈技術の効果の指標・目指すべき水準〉

分類	指標	現状	目指すべき水準	備考
環境 省力	化学農薬の使用回数（回）	17	▶ 12	定植後の薬剤散布回数
			▶	
			▶	
			▶	

* 環境にやさしい栽培技術のうち化学農薬・化学肥料の使用量の低減および省力化に資する技術については、原則、検証結果を踏まえて効果の指標・達成すべき水準を設定する（有機農業の取組面積拡大、温室効果ガスの削減に資する技術については、当該欄の記載は任意とする）
* 化学農薬の使用量の低減については、どの剤の使用量を削減するのか、どの剤からどの剤へ切り替えるのかが分かるように記載する

グリーンな栽培体系の普及・定着に向けた取組方針

現地実証の成果や栽培マニュアルを愛知県が開催するイチゴ生産者向けの研修会で紹介する。農業改良普及指導員の定例会議において、本成果を紹介する。

関係者の役割

関係者名	農業改良普及課	JA	JAあいち経済連	生産者
役割	技術指導	技術指導	農薬や資材等についての情報提供	実証事例の情報提供

その他